

# 東海能楽研究会 年報

## 蛇口追跡(その三)

— 狂言面「蛇口」及び補遺 —

保田 紹雲

はじめに

前稿の『東海能楽研究会年報』第十号(二〇〇六年三月三十一日発行)、第十一号(二〇〇七年三月三十一日発行)に連載した拙稿「蛇口追跡(その一)」、「その二」で、因州藩田藏能面に「蛇口」と名づけられた面があり、京都・金剛宗家の「雷」とが、ほぼ同形であることから、現在はこの種の面を「雷」と呼んでいることが多いが、江戸中期にこれを制作した大野出目家で「蛇口」の名で呼んでいたことを記した。

また、大藏虎明「昔語抄」(注1)から大藏家の狂言面に「蛇口」の存在を記した。

本稿は、狂言面「蛇口」の用途である能「儀(いけにえ)」が現在では廃曲になって演じられることが無くなっているのがあるが、この面を探して追加の調査を行なった報告である。

ほかに、能面「蛇口」の用途に関する面打家の資料で前稿を補遺し、能面「蛇口」や「大蛇(おろち)」の同名異相の面を紹介する。

## 大藏流関係の狂言面「蛇口」について

大藏虎明「昔語抄」に「一、蛇口・儀(いけにえ)の間にきる。」とあることから、大藏流に狂言面「蛇口」の面が伝えられている可能性があると推測し、これを確認すべく、大藏流の方々に問合せを行なった。

これについて狂言大藏流宗家・大藏弥太郎師から直接お話を聞き取る機会を得たが、「現在大藏宗家に蛇口の面は無い。維新直後の混乱時に流儀の最重要な面以外の多くの狂言面が散逸した中に「蛇口」の面が含まれていたと思われる。」とのことである。

「狂言面「蛇口」は間狂言用の面で、その能の方が廃曲になって間狂言としても出番が無くなったので、それほど重要な面ではなかったことであろう。」とも語られた。

このお話を聞く中で、宗家はこの面を「じゃのくち」と呼ばれていて、「じゃくち」や「じゃぐち」など、水道のそれと混同するような名では呼ばれなかった。

狂言面「蛇口」の読みは「じゃのくち」が正しいようである。しかし、能面「蛇口」は面裏に「志や口」「蛇口」泉屋博古館蔵・焼印・出目庸久」とある

ので、これを制作した大野出目家では代々「じゃぐち」あるいは「じゃくち」と呼んでいたのであろう。

京都の大藏流・茂山家には人を介して確認してもらったが「蛇口」と名付けられた面は所蔵されていないとのことである。

## 林原美術館の狂言面「蛇口」について

国立能楽堂十周年記念特別展図録「林原美術館蔵・備前池田家伝来の能面能装束」(注2)の巻末の付表のなかに、「No.61狂言面・蛇口・面裏に朱で蛇口」とあるのを発見して、これを纏められた田邊三郎助氏に問合せをしたところ、能面「蛇口」とは違った相の面であるとの教示を得た。

この一覧表は形を変えて田邊三郎助監修「池田家伝来・能面・林原美術館蔵」(注3)にも掲載されている。

林原美術館から特別許可をいただいでこれを拝見することが出来た。



①



②

写真①② 狂言面・蛇口  
縦二・八、横十五・九、厚八・一  
林原美術館蔵

まず、この面の最も目立つ特徴は顔の下半分に三角形に大きく開かれている口である。

顎先は次第に細く尖って、口中には金泥の小さい歯がびっしりと並んでいるが、牙も小さく、荒々しい感じはない。

口の中の真っ赤な大きい舌は先端で細くなり、舌の中央の縦の溝が先端で二つに割れて蛇の舌を現している。

顔の上半分は擬人化した男性の顔で、人間的な通常の耳があり、頭はつべんが尖ったタビリケン頭。額の皺は深いU字形で四本重なっている。

眼の上の眉骨が異様に下がって正面から見ると眼穴の中心近くまで垂れ下がっている。顔の彩色は鮮紅朱を含む朱色で、ゆるやかに曲がった細い髪の毛が頭頂部に書かれている。目の形が、能面の太癩見などに見られる形の、目頭部分が直線的なD形で、眼珠は眼金具の代

用であろうか、金泥で塗られている。能面の「蛇口」や「雷」に見られる鯉か蛇の鱗を表すような突起などは何も無い。面全体の印象は眉が吊上がったもの、蛇々しい所は感じられず、蛇としては、毒蛇では無く、無毒の蛇のようだ。面裏は木地のままで、鑿の跡は全く見られない状態にまできれいに研ぎ出され、磨かれた表面に極上の木曾檜の非常に細かい柾目の年輪が見事である。朱墨で「蛇口」と記され、貼付された紙片が二枚「準狂面六号」「六一」とある。

大野出目家が考えていた能面「蛇口」の用途

「蛇口追跡(その一)」でこの面の用途について「能面大鑑」「舞影一斑」など写真図録の説明文から用途を転載したが、大野出目家の伝書にも能面「蛇口」の用途を記されたものがある。

「大野出目家伝書」(注4)の面の名寄で用途を記した項に「蛇口 般若同断」があり、般若の条には「般若 道成寺、葵上、黒塚」とある。

「蛇口追跡(その一)」でも記したように、蛇口を制作は大野出目家四代満矩(洞水、五代満猶(甫閑)、六代庸久(友水)、(但し、歴代数は「出目由緒書」による(注5))の作品が殆ど同じ形・色のものが残されていることから、大野出目家にはこ

れのマザーモデルである手本面が伝えられていたことが明らかであり、「大野出目家伝書」の面の用途を記した条に「蛇口 般若同断」とあるのは、家蔵の手本面「蛇口」の用途説明であることに間違いはなからう。「蛇口」を打ちながら大野出目家の作者が考えた用途は道成寺だと思ふ。葵上や黒塚は一寸頂きかねるよ

うだ。「蛇口」の口の周りや頬の下から耳にかけて刻まれている尖った鯉と思われる形状のつのは越前系の古い「蛇(じや)」(例えば、福井県池田町月ヶ瀬石家の蛇、同町志津原白山神社の蛇など例は多い)の口の周りに刻まれている同形状の鯉からさらに進化させて大きくしたものと思われ、角は無いが「蛇」と同じ用途の道成寺に用いて異論はないであろう。

能面「蛇口」の同名異相の面

能面「蛇口」の同名異相の面には、延岡・内藤家旧蔵面「蛇」(注6)がある。



写真③ 能面「蛇口」内藤記念館蔵「内藤家伝来の能面」より転載

二月印行・能面資料(一)に題名「大野出目家伝書」として掲載されている。両書と比較すると数文字の違いが見られるが、大略同一であり、底本が同じものと認められる。

「注5」出目由緒書 東北大学図書館蔵・明治十八年十二月廿八日大野出目家十二代出目丘著作で歴代当主の歴代数も記されている。これには洞白が欠落して、洞水が三代助左衛門の養子として四代になつてゐるため、広く知られてゐる喜多古能著「仮面譜」より、歴代数は一代分少ない数になつてゐるが、大野出目家当主の記した資料であるのでこれを採用する。

「注6」延岡市内藤記念館蔵・能面「蛇」(延岡市教育委員会発行「内藤家伝来の能面」平成十年九月二四日発行。「延岡・内藤家旧蔵の能面」国立能楽堂1995特別展示図録49頁・付表No.65も同じ)。

「注7」根来寺の能面「淡交社発行・田邊三郎助監修二〇〇二年五月三日発行四〇四「大蛇」

「注8」根津美術館蔵・大顰・面裏に焼印「出目洞水」朱漆銘「享保十三年戊申弥生出来」とある。因州藩旧蔵面「能面大鑑」下巻には洞白と誤っている。

「注9」鈴木一男編・発行「鳥羽の能面」(初版)平成五年十月一日 四九頁三二図。(改定版)平成十七年四月一日発行同頁同図。

「注10」泉屋博古館蔵、蛇口・友水作。「泉屋博古館紀要」第十九号(平成十五年三月三十一日発行)

「注11」拙稿「続・因州侯(鳥取藩池田家旧蔵能面に關する考察)『名古屋芸能文化』第十四号・平成十六年十二月発行三九頁

面裏に焼印(緑青入り)「天下一若狭守」、朱漆銘「しやくち」がある。直線的な角があり、口中には舌を持つので「蛇」であるが、目は半眼で眉間から額の両側へ上がる窮縮が深い。目の周りへ濃い朱を塗り、そこから眉間へ続く窮縮へ朱で隈取った異形の面である。

能面「大蛇」の同名異相の面 「大蛇(をろち)」の同名異相の面には根来寺蔵や伊勢・鳥羽の賀多神社蔵のものがある。



写真④ 能面・大蛇 根来寺蔵「根来寺の能面」より転載

相はいかつい男の相で、根津美術館蔵・大顰(注8)に似ているが後補で口の周りや眉に胡粉と墨によつて尖ったつのつのが描かれている。解説に「表面額の左右や顎の周りに植毛の痕が見られ、裏面には嵌め木や材の削りがあることから、別種の古面の作り替えとも考えられよ

う。」とあり、眼の穴が小さく感じられることも後補のように思われる。伊勢・鳥羽の賀多神社蔵「大蛇」(注9)には角や舌は無い。



写真⑤ 能面・大蛇 賀多神社蔵「鳥羽の能面」より転載

相はいかつい男の相で、口髭や口の周りと眉に尖ったつのつのが彫出され全面金泥塗りである。

面裏の貼紙に墨書「ヲロチ」、朱書「百廿二号」とある。

なお「鳥羽の能面」(初版)では分類を神楽面としているが、(改定版)では分類を能面、名称も「雷」と変更している。

前稿の訂正

「蛇口追跡その一」で(2)泉屋博古館蔵・蛇口・友水作・「泉屋博古館紀要」掲載(注10)の説明に「志ヤ口元文三戊午十二月出来」の墨書と記したのは朱漆書であり、訂正する。

また、面裏の焼印には「出目庸久」とあって、剃髪して友水と改名(延享四年十一月十四日剃髪して改名)

出目元休家墓参記

飯塚恵理人

平成二十年九月二十六日、保田紹雲先生に東京都新宿区高輪二丁目の浄土真宗正源寺にある出目元休家の墓地にお参りされることのでしたので、一緒に連れて行っていただきまし。現在出目姓の檀家の方は、いらっしゃらないとのことでしたが、墓地の一角に江戸末期に立てられた墓石が一基ありました。墓碑の文字を読むと以下ようになります。(寺の記録にある人名には頭に☆を記した。【】内は欠字推定。元号のあと(一)に飯塚が私に西暦を補った。)

- (正面)
  - ☆妙智信尼 享保十(一七三三) 壬子年七月十九日
  - 貞運信尼 宝曆十二(一七六二) 壬午年正月廿八日
  - ☆寿貞信尼 安永七(一七七八) 戊戌年三月十六日
  - ☆元貞信士 文化九(一八一二) 壬申年十二月廿一日
  - ☆妙玄信尼 文化十三(一八一六) 丙子年八月廿九日
  - ☆妙順信尼 天保四(一八三三) 癸巳年七月三十日
  - ☆元休信士 天保四(一八三三) 癸巳年八月十日
  - (向かって左の面)
    - 出目三光坊 天文元(一五三二) 壬辰、天文二年(一五三三) 癸巳十月

三日

越前出目四代 教心信士 享保八(一七二三) 卯年九月十三日

- ☆妙雲信女 文化九(一八一二) 壬申九月十五日
  - (向かって右の面)
    - ☆妙為童女 ☆深廣童女
    - ☆念童女 ☆誓廣童女
    - ☆教童子 ☆智順童子
    - ☆専童女 ☆幻證童子
    - (裏面)
      - ☆妙敬童女 天保十二(一八四一) 丑年六月十三日
      - ☆妙曜信女 天保十三(一八四二) 寅年四月廿二日
      - ☆元休信士 安政元(一八五四) 寅年閏七月廿二日
      - ☆顕示信士 萬延元(一八六〇) 申年七月二日
      - ☆妙楽信女 文久二(一八六二) 戊辰年八月三日
- 正源寺には、出目一族の没年月日と戒名が、貞享元(一六八四)甲子年より明治二十(一八八七)年までの約二百年に渡って記録として残されています。出目一族の代々について研究は保田紹雲先生にお任せしたいが、墓参の記録として拝見した記録から記事を拾うと以下のようになります。(墓碑にある人名については没年の前に★印を記した。)
- 貞享元(一六八四) 甲子年十月二十四日 釈妙玄 出目源七母

(注4)「大野出目家伝書」は野々村蘆舟稿「続能苑日抄・能面記録」(謡曲界)第二五巻第五号・大正十五年十一月号)に発表されたのが最初のものであろう。喜多文書にあつたもので、奥書に「右相認る處の面書は、洞雲庸隆家伝之書、脇本藤三郎門人成るにより相伝へ候を、藤三郎倅小川吉五郎より相望み借受け、写置者也」とあるが、本の題名は記されていない。また、能面研究会編「面目利書・仮面譜・大野出目家伝書」(京都市中京区三条通麩屋町東入・檜書店内・昭和四一年十

月三十一日発行)

月三十一日発行)

月三十一日発行)

- 元禄六(一六九三) 癸酉年九月二十八日 積了夢 出目元休俸
- 宝永五(一七〇八) 戊子年閏正月七日 積妙清 出目元休俸
- 正徳五(一七一五) 乙未年二月五日 積淨意 出目元休俸
- 正徳六(一七一六) 丙申年四月二十二日 積妙閑 出目元休俸
- 享保四(一七一九) 己亥年三月二十五日 積玄休 出目元休 北八丁堀
- ★享保十五(一七三〇) 庚戌年十一月十四日 積妙為 出目元休娘
- ★享保十七(一七三二) 壬子年七月十九日 積妙智 出目元休妻
- 宝暦八(一七五八) 戊寅年十一月八日 積元休 出目元休
- ★明和七(一七七〇) 庚寅年七月二十四日 積深廣 出目十八娘
- ★安永七(一七七八) 戊戌年三月十六日 積寿貞 出目元休姉
- 安永七(一七七八) 戊戌年八月二十日 積教受 源助(飯塚注)「出目」とは書かれていない。
- ★天明二(一七八二) 壬寅年七月二十六日 積誓廣 出目元休俸
- ★天明三(一七八三) 癸卯年十月十三日 積智順 出目元休俸
- ★文化三(一八〇六) 丙寅年三月八日 積幻證 出目仲俸
- ★文化九(一八一二) 壬申年九月十五日 積妙雲 出目仲妻
- ★文化九(一八一二) 壬申年十二月二十五日 積元貞 出目元休
- ★文化十三(一八一六) 丙子年八月二十九日 積妙玄 出目仲母

- 文化十四(一八一七) 丁丑年七月二十三日 積空順 出目仲俸 当歳
- ★天保四(一八三三) 癸巳年七月三十日 積妙順 出目次郎左衛門妻
- ★天保四(一八三三) 癸巳年八月九日 積元休 出目次郎左衛門
- ★天保十二(一八四二) 辛丑年六月十三日 積妙敬 出目仲娘おさん 本所 四歳
- ★天保十三(一八四二) 壬寅年四月二十二日 積妙曜 出目元休妻 本所
- ★安政元(一八五四) 甲寅年七月二十二日 積元休 出目元休 本所
- ★万延元(一八六〇) 庚申年七月二日 積顯示 出目源助弟重八 廿歳
- ★文久二(一八六二) 壬戌年八月三日 【積】妙楽 出目源助妹かつ 廿一才
- 明治二十(一八八七) 丁亥年三月三日 積源澄 出目源助 神田区佐木町 山本藤五郎方二而同居
- 補記 墓参と記録の閲覧を許可頂きました正源寺様と、同行していただき、貴重な御教示を頂きました保田紹雲先生に心より感謝致します。本稿は平成二十年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金助成による成果の一部となります。

能「百万」の展開

— わが子に会わせてたび給え —

三苦 佳子

「百万」という能は、狂乱の姿

ために、清涼寺の法会場で芸能(曲舞)が奉納されるといふ状況で始まります。百万はまず「我が子に鸚鵡の袖なれや 親子鸚鵡の袖なれや 百万が舞を見給え(次第)」と謡い出し、続いて「百万の舞いの袖 わが子のゆくえ祈るなり(一セイ)」と、祈願の言葉を公衆の面前で高らかに謡いあげます。「二場」で一人折っていた時より、百万の願望は強く打ち出されています。僧に励まされたことも手伝って、わが子に会えるかもしれないという期待も高まっているといえるでしょう。

が子もまた母と生き別れになったことを悲しんではいないのか、母に会いたがっていないのかと、子供を思う気持ちでいっばいになり、平常心を保てなくなっていく様子が語られているからです。

曲舞の場面が終わっても、百万の感情の高まりはそのまま次の「五場」に持ち越されます。「あらわが子恋しや」というセリフによって胸の思いを吐露すると、舞台の緊張感は一気に高まり、狂ったようにわが子を捜して歩きまわる(観世流金剛流は立廻、宝生流はカケリ、金春流喜多流はイロエ)クライマックスの場面へと展開します。しかし、いくら探してもわが子に会うことはできません。「これほど多き人の中に、なかわが子のなきやらん」と悲嘆に暮れながらも、なおも百万は「誓いに会わせてたび給え」と祈り続けます。

結末の「六場」では、百万のあまりに哀れな姿を見かねた僧が、百万と子供と引き合わせることで事態は急転し、ついに念願の親子再会が叶うこととなります。

曲舞の場面はさらに、イロエ、クサシ、クセと続き、クセの最後「親子鸚鵡の袖なれや 百万が舞を見給え」と再び次第の文句で謡い終えます。舞を伴った長い音曲として作られている曲舞は、世阿弥が精魂こめて綴っているだけに難解な文章であるという印象を受けます。しかし、今、現在のこの曲舞を舞うに至るまでの百万の物語が、百万自身によって語られている、というのが百万の舞う曲舞の内容なのです。不運な身の上話から始まり、清涼寺に至るまでの道のりや、寺のご本尊に望みを託す百万の心境が、春の景色を織り交ぜた詩情豊かな言葉によって細やかに描かれています。

劇としての展開を考える上では、クセの最後の部分の内容が重要で、お釈迦様でも母の死を悲しんで説法をしたことを思いだした百万が、わ

以上のように、百万の行為とセリフに注目しながら劇としての展開をみたわけですが、世阿弥は、百万の内なる願望、わが子に会いたいという欲求を、劇中の所要所で観客に印象づけるような形で、百万に発言させていました。また、能の見せ場、すなわち、車の段、笹の段、曲舞、といった演者が技芸を発揮する場面

(物狂い)となつてわが子を捜す主人公、百万を、曲舞を舞う芸能者という設定にして、百万の舞う曲舞の場面を軸にして作られている世阿弥の作品です。その結末で百万は、生き別れになったわが子との再会が叶うことになっています。

一般に劇においては、主人公は常に一つの目的を追求し、その目的を達成させるために一貫した行動をとります。能「百万」においても、その目的は、わが子との再会を果たすことであるのは明らかです。百万はその目的をかなえるための行為を舞台上どのように演じているのでしょうか。ここでは、主人公である百万が舞台上で何を言い、何をしゃべる(謡う)のかという視点から、百万の行動を追ってみましょう。

能「百万」の劇としての進行、展開は、六つの場面に分けて考えることができます。

冒頭の場面(一場)では、子供(実は百万の子)とその保護者である僧(三吉野の男や都の男の場合もある)が清涼寺の大念仏を訪れると、釈迦堂門前の男が、面白く芸を見せられる物狂いの女、百万を誘い出すこととなります。

(二場)では、門前の男の下手な念仏に文句を言いながら登場した百万が、正しく念仏を唱えてみせて、そのまま面白く念仏踊り(車の段)を披露すると、一旦合掌をします。その後、みすばらしい自分の姿につ

いてひとしきり面白く謡い舞って(笹の段)みせた後、もう一度合掌して、「わが子に会わせてたび給え」と祈ります。この祈りの言葉によって、百万の胸に秘められていた願望が何であるのかが、初めて観客に明らかされます。

(三場)で問答の場面が変わると、偶然に清涼寺を訪れていた子供が、百万をみて自分の母かもしれないと気づきます。僧に尋ねられた百万は、出身が奈良であること、夫に先立たれ、わが子とは生き別れになったことに加え、「念仏申し身を碎き、わが子に逢はんと祈るなり」と答えます。必要最小限の短い会話ですが、これによって百万という人物のおおよその事情が紹介されたこととなります。百万が狂ったように念仏を唱えているのも、なりふり構わず面白く芸を見せて歩いているのも、すべてわが子に再会するという目的のための行為であったということが、ここではつきりします。

この場面は、百万がまさに曲舞を舞おうとしている、そのどさくさに紛れて僧が百万に声をかけたという状況ですので、きつと子供と再会できるだろうと百万を励まして、僧は退きます。一方の百万は、僧の言葉に勇気づけられたことで、曲舞を舞うという次の行動へと、気分も新たに臨むことができるのです。

百万が曲舞を舞う場面(四場)は、母と子の再会という悲願を達成する

はすべて、わが子との再会という目的を達成させる手段として演じられていました。能全体の展開においては、こうした百万の行為、演技と、わが子に会いたいという願望との間に破綻が生じないような作者世阿弥の配慮が行き届いています。

世阿弥は、百万の行動を駆り立てている、内面的な要望、目には見えない心の動きに注目し、劇としての展開の中で、その感情を次第に高めながらクライマックスへと到達させ、さらに窮地に至った後に問題を解決させていました。古今東西の劇作家と同様の、ドラマ作りの基本となる展開が、能「百万」には認められるのです。

新作狂言「因幡薬師」上演の顛末

林 和利

このほど、野村万作先生の発案で新作の狂言を書かせていただくという僥倖に浴し、無事上演もかなったので、その経緯と制作のあらましを報告しておきたい。

ことの発端は、二年前の平成十九年四月二十九日に遡る。その日「因幡堂で狂言『因幡堂』を観る」という催しがあった。その名の通り、京都下京区に現存する因幡堂(平等寺)において、狂言「因幡堂」と「仏師」が万作一門によって上演されたので

ある。(その概略は本紙第十二号で報告させていただいた。)

その舞台が終わって雑談をしているとき、万作先生が、「狂言小謡の『薬師』を用いて因幡薬師を舞台にした新作狂言ができるんじゃないかな」とおっしゃった。

すると横にいた高弟の石田幸雄さんが、「たとえば、『鬼丸』という狂言と組み合わせたらできるかも」とヒントをくださった。

私は宿題をいただいたような気分でご古屋に戻り、すぐに構想を練り始めた。

小謡「薬師」の詞章は次のとおり。

十七八は なげしの埃 やよ  
皆殿たちの 皆殿たちの やよ  
目に入りた 目に入りた やよ  
目に入りたらば 薬師へ参れ  
薬師の前の やよ  
目医師しよ 目医師しよ やよ  
十七八の娘は長押の埃みたいなもので、男達の目にはいる。すると一目惚れの目病みになるから、お薬師さんへ参詣しなさい。さあ、お薬師さんの前の目医者だ」というのである。

この詞章は、「鬼丸」よりも「金岡」と関連させやすいと判断し、さっそく試作品を作った。

あらすじは――

祇園の舞妓に一目惚れした恋狂いの男が、妻に勧められて霊験あらたかな因幡薬師へ参詣する。たまたま来合わせた近所の目医者の治療を受

ける。一目惚れは目から入った病だとの診断。その目医者<sup>の</sup>作った目薬をさしてみると、すべての女性が美しく見えてしまう。あたりかまわず周りの女性に懸想して妻に叱られる—というもの。

「薬師」の謡は目薬をさすところで用いる。謡いながらさすのである。大筋は早いうちに固まって、ほとんど変更しなかったが、大きく変動したのは恋狂いの男の登場場面。

「金岡」と同じ趣向で、京都市中をほつつき歩いてる男を妻が探しに出掛けて見付けるところから始まるのだが、その登場に、最初は「京都の恋」という流行歌を用いた。しかし、さすがに遊びすぎと判断し、「金岡」と同じ小歌を用いたところ、「重すぎる。『閑吟集』あたりから採れないか」と、万作先生からアドバイスがあった。

それを受けて私は、『閑吟集』所収歌をすべて読み直して吟味し、最もふさわしいと判断した二曲を選んで組み合わせしてみた。新作の小歌である。

忍ぶれど、色に出にけりわが恋は、色に出にけりわが恋は、ものかしの、漏りける袖の涙かな。げにや、恋すてふ、わが名はままだき立ちけりと、人知れざりし心まで、思ひ知られて恥づかしや。さて、何とせう。一目見し面影が忘れぬ、一目見し面影

が忘れぬ。

我ながらうまく出来たと思う。あえて注釈するなら、これには有名な古歌が二つ折り込まれている。

一つは、平兼盛の「忍ぶれど色に出にけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで」であり、もう一つは壬生忠見の「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」である。

両首とも二人の代表作。天徳四年（九六〇）の歌合わせで番になった歌である。兼盛が勝ち、負けた忠見は落胆のあげく、食欲をなくして床についたという伝説がある。『拾遺集』「百人一首」などに収録されている。

全体的にも万作先生が手を入れてくださったので、監修・野村万作という形で仕上がった。

初演は、今年の「因幡堂で狂言『因幡堂』を観る」（平成二十一年四月）で実現した。配役、男・深田博治、妻・高野和憲、藪目医師・月崎晴夫。演出はもちろん野村万作先生。出演者自身による演技の工夫もあったと聞いた。

なかなかの熱演だった。とても初演とは思えぬスムーズな舞台運びで、観客の好評を得た。作者としては、極めて満足している。

再演されればさらに洗練度が高まるはずであるが、そんな機会はあるのだろうか。

平成20年度研究会例会記録

平成20年5月4日（日） 名古屋女子大学汐路学舎

題目 能「皇帝」について

輪読 山脇得平本間狂言輪読《嵐山》

平成20年6月22日（日） 名古屋女子大学汐路学舎

題目 作品研究「千寿」

輪読 山脇得平本間狂言輪読《敦盛》

平成20年8月17日（日） 名古屋女子大学汐路学舎

題目 能楽師 尾崎浪音について

輪読 山脇得平本間狂言輪読《巴》

平成20年10月13日（月） 体育の日） 名古屋女子大学汐路学舎

題目 観世信光の「風流能」―（太施太子）を中心に―

輪読 山脇得平本間狂言輪読《八島》

平成20年12月21日（日） 米野コミュニティセンター

題目 岡山藩主池田綱政と能

題目 能における月について

輪読 山脇得平本間狂言輪読《知章》

平成21年2月22日（日） 米野コミュニティセンター

題目 「山脇和泉家の問狂言諸本について」

輪読 山脇得平本間狂言輪読《忠度》

米田 真理氏  
野崎 典子氏

中尾 薫氏  
飯塚恵理人氏

尾崎 正忠氏  
藤岡 道子氏

米田 真理氏  
田崎 未知氏

西脇 藍氏  
伊藤 利香氏

三苦 佳子氏  
佐藤 友彦氏

中尾 薫氏

東海能楽研究会年報 第十三号

二〇〇九年（平成二十一）三月三十一日発行

代表者 寛 鉦一

編集 名古屋女子大学文学部 林研究室

〒468-8507 名古屋市中天白区高宮町一三〇二

印刷者 共生印刷株